



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イウォロを通してみる沙流川流域の文化的景観（※口はアイヌ語表記では小文字）
Author(s)	四戸, 秀和
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 14-15
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92879
Type	other
File Information	ronshu_biratori (9).pdf



イウォロを通してみる沙流川流域の文化的景観

四戸秀和
北海道大学観光学高等研究センター 研究員

イウォロ（IWOR：伝統的生活空間）は、アイヌが暮らしてきた生活の場とそのシステムに関する概念である。文化人類学者の泉靖一は、1951（昭和26）年に平取に訪れ、調査結果を「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR（民族学研究第16巻3-4号,1952）」にまとめた。そこには、沙流川流域におけるアイヌの地縁社会が、イウォロという概念をどのように用いていたかの一端が記されている。例えば、動植物の狩採集場と漁場といった場の資源性を捉える概念であったことや、そうした狩採集のための制度・規制に関わるものであったこと、また、沙流川流域全体のサルUNKルのイウォロとコタンのイウォロという階層性があったことなど。これらの具体的な記述はこの地のアイヌ文化を理解し文化復興を目指す上でとても重要なものといえるだろう。

沙流川流域では、伝統的生活空間としてのイウォロの現代的復興に向け、エコミュージアムの考え方を取り入れた地域ビジョン「イオルネットワーク構想」（2001）のもと、さまざまな取り組みが行われてきた。本論集のテーマである文化的景観に関する取り組みにおいては、2007（平成19）年の一次選定に始まり、現在四次追加選定に向けた作業が進められているが、そこではコタンのイウォロを景観単位として導入することで、これまで個別に捉えられていた河川や森林などの構成要素を沙流川流域の広がり（アイヌのコスモロジー）に位置付けて価値づけを試みている。その作業に関わる中で筆者が作成したのが図1のコタンのイウォロ復元図であった（図1）。泉が論文に示された図は、そのまま現代の地図に落とすことが難しかったため、泉の記述をもとにルールを設定し、GIS上で沙流川流域の集水域（分水嶺）の境界線を下敷きに作図した。したがって、泉の調査したコタンのイウォロを正確に復元したとは言えないのだが、このコタンのイウォロというフレームを通して沙流川流域を見ることで、この地域の特徴的な地形とアイヌ文化に関わる構成要素の立地関係がよりわかりやすく読み取れるようになったと考えられる（図2）。

河川の氾濫による水害を避けて河岸段丘上に立地したコタン（集落）は、その立地や内部の空間構成を大きく変えずに現代の市街地へと移り代わってきている。コタン周囲の自然資源の広がる狩場（山や川）は、近代の手が入りながらも、アイヌの方々とともに形成された暮らしに根づく土地利用（施業林や農地・牧野）へと変遷してきている。その場の特徴を示すアイヌ語地名は多くの場所で継承され、特に特徴的な様相を呈す地形（山容など）には、アイヌの精神世界を象徴するような伝承が受け継がれている。

このような現代に受け継がれる地形的特徴とアイヌ文化に関わる要素の立地の関係性に見出せるのは、古くからこの地で自然と共に暮らしてきた人々の世界観であり、生活の知恵である。それは、自然資源を持続的に利用していくことを改めて目指す現代社会に対し大きな示唆を与えてくれるだろう。そうした景観が生きたかたちで受け継がれ、そのさらなる現代的な復興が目指されている沙流川流域は、これからの自然と共生する地域社会のひとつのモデルであるように思う。

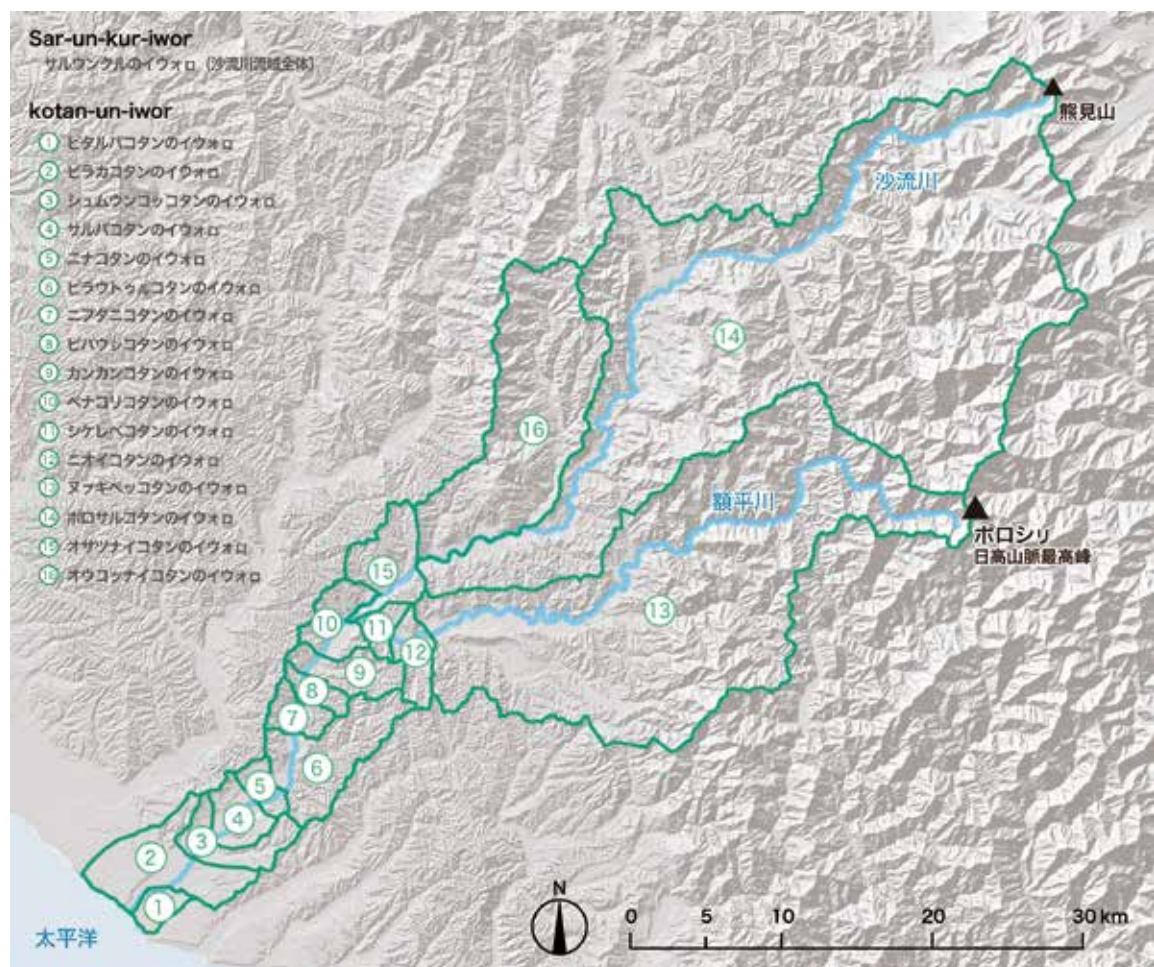


図1 コタンのイウォロ復元図 (DEM データを用いて作成)

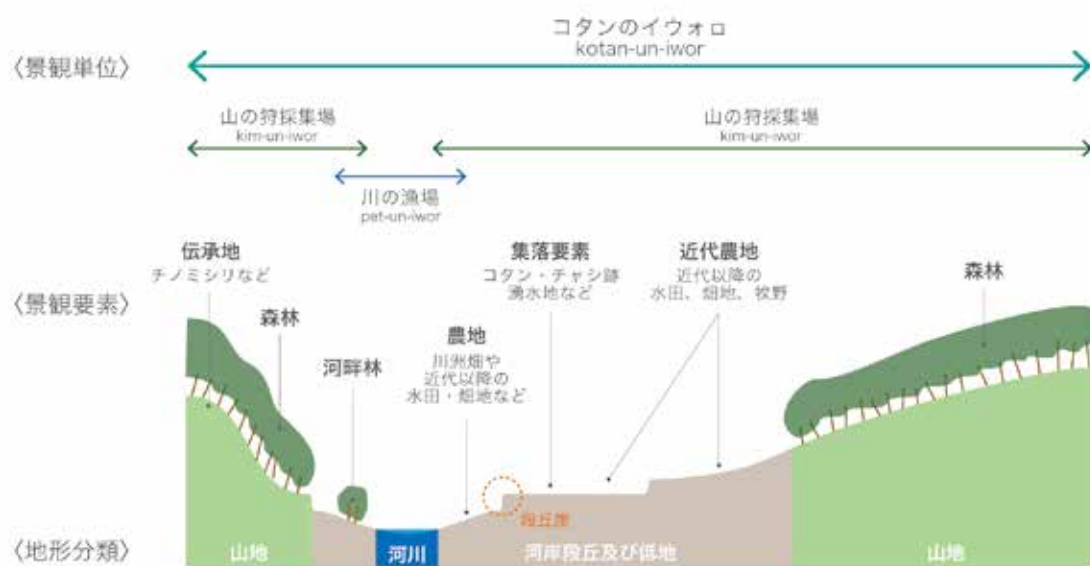


図2 コタンのイウォロの断面モデル図